

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コトボ幡ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649

FAX(03)3299-5367

購読料 月額600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

「人間復興」の都市づくりめざす……………2

「新しい神戸をつくりだす市民会議」の行動綱領……………3

五月に社会党解党・新党論に批判高まる……………3

——山花派、全通労組にも捨てられる——……………6

地震口実に「人権侵害」続出……………6

——阪神大震災「労働・雇用ホットライン」から——……………8

松崎明氏の戦後民主主義論……………8

「社会通信」六百号に寄す……………12

沈黙は金に非ず、組織にとつて死……………12

歴史的転換期、切り拓く力つくれ……………12

「弁証法」の湧出を……………13

——佐々木守雄……………13

——全通・第二回全国青年部代表者会議から……………14

読者からのおたより……………15

編集部だより……………11

◆新刊案内 上野建一著 社会通信刊 ◆……………11

政界再編後を読む——護憲の旗を掲げて……………11

A6判上製、二百頁、千五百円(二千三百十円)

旬刊 社会通信

NO. 601

一九九五年四月二一日

一九九五年四月二一日発行
(毎月一日・二一日・三十一日三回発行)

■ 巻頭言 ■

「人間復興」の都市づくりめざす

「新しい神戸をつくりだす市民会議」の行動綱領

一、さまざまな人に、さまざまな場所で提言 ①市民へ市民自らの街づくりを呼びかけます。確かに、兵庫県南部地震は非常に大きな地震でしたが、その被害をより大きくしたのは、地震以前の神戸市政のあり方に大きな原因があったことは、多くの市民が認めるところだと思います。しかしながら、その神戸市政のあり方を最終的に規定するのは「市民のあり方」にあります。人間の間にあった住みよい街をつくるためには、行政に任せるのではなく、市民自身が主体的に行動していくしかありません。復興への市民参加は市民の固有の権利であり、人間復興のための街づくりは市民の人権の復興です。市民会議は、市民による人間復興のさまざまな活動を呼びかけていきます。

②行政に対して対案作成・政策提言を行っていきます。神戸市は、これまでの開発計画と同様に、市民の声を無視して次々と復興計画を提出してきています。しかし、市民の個人々では、行政がだした計画を論理的・専門的に論究するのは非常に困難です。市民会議は、市民の声を集め、市民と一緒にあって、神戸市の計画に対する対案を行政に提示・交渉する活動を行っていきます。

③神戸から広く全国の人たちに発信していきます。人間の等身大の住みよい街づくりのためには、私たち市民の協力の力に加えて、全国の多くの人たちの協力は重要な力です。市民会議は、この協力を求めるために、神戸の動きを広く全国の人たちに発信していきます。また、神戸の教訓・経験を全国に発信することで、全国の仲間たちに自分たちの街の状態を考えてもらう契機を提供し、全国的な人間の等身大の街づくりの運動を提起していきます。

二、さまざまな「市民講座」を行っていきます。市民の問題意識を明らかにして、その市民の声を有効に發揮するために、いろいろな形の市民講座を適宜行っていきます。

①提言的講座 有識者を中心に、神戸市政に対する具体的な提言を披露してもらう講演会を適宜行います。

②市民講座 主人公である市民に、街づくりのために必要な広範な知識をもってもらう場をともにつくっていきます。

③地区集会的講座 地区の固有の課題に対応して、地区の運動の手助けとなるように、そのニーズにこたえる講演会を行っていきます。

三、さまざまな人たちの意見を積極的に聞きます。私たちだけの知恵と力量だけでは、具体的に何を行っていけばよいのかを決めることは困難です。地域に住んでおられるいろんな人たち、全国の研究者・知識人・文化人の意見を積極的に聞いて、市民会議の活動の指針としていきます。

四、具体的に市民会議自ら「街づくり」運動を市民とともに 各地区で行われている街づくりの運動を側面的から協力していくこととどまらず、市民会議自らが街の環境を改善する活動を展開していきます。例えば、市民による地区のランドマーク調査や景観調査、住民調査、その調査を元にした街の環境改善活動などをイベントとして提起することが考えられます。市民会議は、市民とともに汗を流す活動を通じて「自分たちが街をつくっていくのだ」という実感を共有しながら、真の市民参加の形を模索していきます。

五、市民会議の活動を維持するためには、次のことが必要。①「安定した財政」が必要です。② 私たちの行うさまざまな企画・提案に参加して下さい。③ すなわち、私たちの呼びかけの「賛同人」になってください。

五月に社会党解党・新党論に批判高まる

——山花派、全通労組にも捨てられる——

「東京三菱銀行」の合併は独占資本の強化

不況が永く続き、人べらし合理化、中小企業の倒産、失業者の拡大のなかで、資本の集中集積は益々進行している。独占資本間の競争も激しく、大型合併・吸収で生き抜こうという形も多くなっている。

旧財閥系の中核・三菱銀行と海外業務に強い東京銀行の吸収・合併は、今年の秋から来春までに実現するといわれ、日本独占資本の頂点に立つもので、預金量五十兆円は世界最大の巨大銀行となる。巨大資本・独占は不況のとき一層肥大化するといわれるが「東京三菱銀行」の合併はまさにその実例である。三菱銀行は九四年に日本信託銀行を子会社にしており、東京銀行の「金融債発行」業務をもつことにより市場独占への方向に前進したことになる。日本の大企業（独占資本）は系列ごと大銀行をもつて、豊かな資金を背景に海外進出、国内市場の独占を成しとげてきたわけで、三菱重工（日本最大の軍事企業）など三菱系企業にとつても極めて有利な事態となる。東京銀行は今まではいずれの系列にも属していなかった、いわゆる中立系であるだけに三菱系の系列強化にもつながらるわけだ。独占化を防止する立場の「公正取引委員会」はその任務を放棄、合併を認めることになるという。

いずれにせよ不況のなかで、中小金融機関の多くはいつ倒産してもおかしくない状況におかれており、強い銀行（大銀行）と間の格差は拡大する一方である。財界・大蔵省を中心とする支配層は、日本の都市銀行は五つか六つあればよいと考え、その方向に整理統合しようとしている。中小金融機関は数年のうちに淘汰されることになろう。

そのための第一段が三菱銀行と東京銀行の合併（事実上東銀の三菱銀への吸収である）である。新聞紙上で報じられているように、財界の代弁者である大蔵省は、今度の合併を大歓迎している。そこで問題なのは、金融機関で働く者のことである。「東京三菱銀行」の場合、従業員は三菱・一万六、二二一人、東京・八、四九九人で合計二万四、七一〇人となるが、合併合理化によって三分の一は間違いなく「人べらし」となる。今度の合併について、労働組合の口の字も見えない。労働組合にはいっさい相談はないといわれる。金融関係労組には組合員の職場を守り、人権を守る気力さえないのであろうか。保守主義の市場経済万能の考え方で、組合員の意識を弱体化させている「連合」の方針下ではやはりダメなのだろうか。

三菱と東京の両銀行の合併を数字で見ると別表のようになる。

「東京三菱銀行」は資金量（預金と金融債）で五十兆円超となり、現在世界一位のさくら銀行（預金量三十九兆円）より多くなる。この大きな力（その第一は豊富な資金量）で海外での活動を強めてくる、と他の独占企業グループからは反発的発言が出始めている。三菱グループは、他企業の反撃に備えて、グループ内の合併を進めてきた。三菱マテリアル（三菱鉱業セメントと三菱金属の合併）、三菱化学（三菱油化と三菱化成）という大型

合併があった。さらに三菱重工業は三菱原子力工業を吸収した。太陽酸素と東洋酸素が合併して四月には太陽東洋酸素となるという。このように三菱グループは明確な独占体としての企業戦略をもって、その第一段階としての合併なのである。

これに対しては当然、住友、三井など旧財閥系グループの動きも出て来るだろうが、出遅れているようだ。三菱グループからは次期日経連会長（五月から根本二郎日本郵船社長）と行政改革委員会のトップ（飯田庸太郎三菱重工会長）を出すことになった。三菱グループは名実共に財界の先頭に立っている。パブル崩壊・不況のなかで、村山内閣に「規制緩和」を一層実行させ、新保守主義の経済体制の確立をはかり、マス・コミを巻き込んだの憲法改悪を政治戦略に財界のタカ派は勢いを加速させている。

山花派離党益々孤立化

山花派は二十四名で先行離党し「リベラル新党」をつくろうとして動いたが阪神大震災で断絶していたが、その後社会党執行部が新党検討委員会で決めた五月の解党・新党結成をめざす方針を了承したため「五月新党」に合流し促進の立場をとってきた。しかし社会党全体としては統一自治体選挙の結果を見守っており、山花派は孤立化を深めてきていた。五月新党にあくまでこだわるメンバーも減り、十人前後となっている。そこを直撃したのが全通労組である。三月二十九日の全通地方本部委員長会議は、三役と山花派との関係を批判、①山花派が離党しても支援しない、②参院選前に新党ができない場合でも、参院選では社会党候補を支援する、③伊藤基隆委員長を参院比例区候補として出馬させる、などの方針を決めた。この方針は今までの三役中心で全通や鉄鋼などと進めてきた山花新党支持とは大きな違いで、大転換である。明らかに山花派との「絶縁」決定である。これによって山花派は壊滅的打撃を受けることになった。

別 表	三 菱 銀 行	東 京 銀 行
資 金 量	都銀6位	都銀10位
総 資 産	49兆9,500億円	22兆8,383億円
預 金	37兆 752億円	9兆6,937億円
貸 出 金	30兆7,984億円	10兆9,506億円
従 業 員 数	1万6,211人	8,498人
店 舗 数	318店舗	76店舗

(94年9月末)

全通はどうして転換したか、ということだが、それは①「郵政」の分割・民営化に反対してゆくためには、村山自社と連立内閣と対立しては大きなマイナスになる。②盟友組織の全通、電機はすでに社会党執行部支持に戦術転換したこと、③全通の地方組織から山花新党批判が続出し、本部三役が浮き上がったこと、④郵政省当局へは、自民党と社会党閣僚等から圧力が加わり、当局側は職制も含めて労組地本、支部へ働きかけている、⑤三役（ことに伊藤委員長）の責任問題となり、組織にヒビが入りかねない前に、伊藤委員長を参院比例区に立て戦術転換をはかったということである。

それにしても、無責任であり、政治理念のなさにも驚く。一番驚いたのは山花氏であった。

たらしい。全通労組は中央幹部を中心に近年、全電通以上に社会党の解体・新党路線を主張、社会党への介入を深めてきた。社会党の右派の中では田辺誠元委員長が全通出身、山花前委員長、関山信之政審会長が全通の「おおかえ議員」となっている。「山花新党」の一連の言動は労組としては全通が震源地であった。したがって全通にまで見捨てられては、山花派は完全に崩壊するしかあるまい。

一方、参院社会党は二十九日に議員総会を開き、新党結成問題について論議したが、五月結成には、七月選挙の候補者を中心に反対意見が続出した。執行部の新党問題検討委員会のやり方（方針）に反対意見が多く、執行部に反対の申入れをすることになった。

統一自治体選挙結果待ちの状況

統一自治体選挙の結果によって、社会党は分裂か、新党のため解党かなど、いずれ大きく混乱することになる。

- ① 統一自治体選挙（ことに前半の九日）の結果大敗すれば、もう社会党ではたたかえないとする労組幹部の意向で新党論が抬頭する。
 - ② しかし一方で新党ブームなく「腐っても鯛」である社会党の名前で参院選をたたかいたいという勢力も大きく、新党は参院選後ということで、ズルズル社会党で参院選に臨むことも考えられる。
 - ③ 山花派の数人で離党、バラバラのいわゆる流れ解散の方向も考えられる。その場合新進党と組むもの、自民党と協調するものなどいくつかの流れが出よう。
 - ④ 統一自治体選敗北の責任問題も表面化することになる。山花、久保阿氏等に対する批判は当然であるが、村山首相兼委員長に対する責任問題が出て、参院選はいよいよたたかえずらくなる。
 - ⑤ 参院選では、新党であろうと社会党であろうと争点なきたたかいたとなり、自民党の一人勝ち、社会党の大敗となる可能性大である（今の支持率ではどうにもならない）。村山内閣はそこで倒されることになる。しかし連立は続けようとするであろうし、混乱は避けられない。
 - ⑥ 社会党が続くかどうかは、村山首相が首相を続けられるかどうかにかかってくる。しかし不況の長期化、失業、倒産の続出となれば首相の退陣は当然ということになり、右派勢力がいろいろの言動を開始し、党としては分裂状態になる。自民党もタカ派が策動する。国会解散も秋に行なわれる可能性が強まる。
- 以上のような種々様々な政治的変動が起る場合が考えられる。いま社会党をとりまく大衆は、統一自治体選挙の結果を見守っている。

（政権研究班）

地震口実に「人権侵害」続出

——阪神大震災、「労働・雇用ホットライン」から——

ホットラインへの相談一〇〇〇件を超える

震災から二カ月を過ぎるようになりましたが、ようやく神戸の事務所も水が出るようになりました。床のヒビは少し広がっているようだという人もいますが、相変わらず窓は閉まらず、修理にも来てくれません。さて、「阪神大震災、労働・雇用ホットライン」への相談は尼崎・神戸あわせて一〇〇〇件を超えることになりました。相談のほとんどが「解雇」「雇用保険受給」についてですが、二月一日に尼崎、そして二五日に明石で結成した被災労働者ユニオンの分会は七つ、組合員は一二〇人となり、連日、各企業との交渉に取り組み、解雇撤回などの成果を上げつつあります。

神戸事務所には、三月一六日まで国労佐賀・鳥栖闘争団と同全国連絡会議から二名の常駐を頂きました。尼崎にも権利問題研究会から一週間ほどお手伝いを頂きました。そして、現在、神戸事務所にも昇職労から三月末まで一名の派遣を頂いています。さらにこの間、尼崎・神戸両事務所にも、全国ユニオンから節目、節目に応援を頂き、さらに、自治労本部、都職労働局支部有志の応援などを頂いて、この運動を支えていただきました。

これから三月末の年度末をむかえることになり、新たな解雇も予想されます。そのため、あらためて「阪神大震災 労働・雇用ホットライン」を三月末の土・日・月の二五日から二七日に設定した呼びかけをしています。

解雇撤回を次々に勝ち取る

まだ「混乱状況」にあった一月末までは小零細事業所での解雇が多発しました。小零細事業所では正社員も解雇されましたが、二月に入って、ある程度規模以上、大企業も含めて「会社を守るため、正社員の雇用を守るため」にアルバイト、パートの解雇が多発することになりました。それは二月末を頂点に発生しました。

これに対し、私たちは二月二五日に明石（神戸市内で会場がないため）で被災労働者全体相談会を開き、一五〇人の参加を得ました。被災労働者自らの反撃の組織として、先に尼崎で一日に被災労働者ユニオンを発足させましたが、神戸の相談を受けて被災労働者ユニオンを正式発足させました。

二八日に解雇を迫られた神戸国際ステージに解雇され、市立青少年科学館のコンパニオンとして派遣されていた一三人（その後一七人全員）で二七日朝、喫茶店で被災労働者ユニオン分会を結成、交渉申し入れ、責任者を探し回り、ようやく夕方六時から交渉開始。同じく二八日に解雇を迫られたカネテツデリカフーズで深夜（二三時から五時）働いていたパート・アルバイト十人余が二八日朝、兵庫駅改札口に集合して分会を結成し申し入れ。途中、対県交渉。戻って交渉（決裂）。三月一日、雇用保険受給（事業主が加入していない事業所）確認申請。そして、解雇撤回をしないと明言するカネテツ抗議（抗議のポスター街頭貼付）と交渉申し入れ。二日、労働省交渉。三日、デイリークック分会結成。本家かまどや分会結成。四日、フジハウジング分会交渉（決裂）。……こうしてはじまった連日の交渉は着実に成果を上げてきていますが、被災企業の現状は倒壊し、仕事がない中では、

自ずと限界があり!、解雇の撤回を勝ち取っても、震災特例〓休業や一時離職による雇用保険受給出当面の生活をしのぎ、一刻も早い再開を願わざるを得ないのが現状でもあります。

企業の社会的責任は厳しくとも雇用を守る姿を示すこと

私たちの立場 阪神大震災は、命を奪い、家族を奪い、さらに「職」と「職」を奪っている。そして、雇用の場での弱者への過酷な大量解雇が襲っている。ホットラインに寄せられた労働相談は、パート・女性・零細労働者が「災害弱者」として「再建」されようとしている職場から排除されていること、また、なんらの救済措置も見出せず、困り果ててホットラインにかけ込むしかなかった人々の姿を浮き彫りにした。

いま、一刻も早く関係者全員の創意と工夫によって、額に汗してまじめに働き、つつましく生きてきた庶民が、二次的な「災害」を被ることのないように全力を傾けることが問われている。

大震災は悲しい現実だ。さらにその上に「弱肉強食」とみまごうがごときいつそう悲しい人間社会の現実を生起させてはならない。中小企業に働く労働者、不安定雇用とされてきたパート・女性労働者、下請けや派遣の労働者、外国人労働者や外国人留・就学生、高齢の労働者、障害を持つ人たち、…等しく人権を持つものとして差別なく処遇されなければならぬ、と。

私たちの主張 全国の人たちが、神戸の被災者を支援し、神戸の企業頑張れと応援している中で、神戸の企業が労働者の首を切り、生活を奪うことがあっていいのか、神戸の企業が全国の支援に報いる道は、厳しくとも企業の社会的責任として「解雇」を回避するため努力を尽くすこと、労働者の雇用も守って頑張っていることを示すことではないか、と。

大きな影響与えるそごう・ダイエーと交渉

三月一五日にはそごうと交渉し、そごう側は本社人事部長・人事課長、神戸店人事部長・人事部部长・人事課長・人事課課長が出席。組合側は被災労働者ユニオン（黒崎・小西）、ユニオン全国ネット（高井）、そごう分会から三人が出席。

アルバイトについては合意し、五月末「契約期限切れ」となるフリースタッフについては、再度協議することにした。

確認書

「アルバイト」の取り扱いについて会社と組合は下記の通り確認する。「アルバイト」については、「解雇」ではない。雇用保険受給資格のあるもので、「一時離職」による雇用保険受給を望むものについては、その扱いをする。営業再開にともない、職場復帰の条件ができたときは、優先的に復帰してもらおう。雇用保険受給終了後の休業の扱いは、復興計画を踏まえて、その時点で協議する。

三月一七日にはダイエーとの交渉を行い、ダイエー側は本社人事本部労政部長、同副主事、大阪人事本部副参事、同副主事が参加。組合側は被災労働者ユニオン（黒崎・小西）、ユニオン全国ネット（上田・高井）、同関西ネット（北摂〓秦山、北大阪〓瀬戸川）が出席した。

ダイエー側は、再就職先を斡旋した者、今回離職した者に対し、店舗再開時には復職を呼びかけるようにしたいと言明したが、文書送付についても検討することを確認した。

さらに、休業等賃金空白期間に対し、何らかの休業補償をすることなどについても検討し、回答することを約束した（阪神大震災労働・雇用ホットライン共同デスクNo.2より）

松崎明氏（JR総連副委員長）の戦後民主主義論

「九条連」とは

最近、JRの職場に国労を批判したビラが乱れ飛んでいる。どこぞの過激派セクトに特有な文章であるが、発行元はJR総連傘下の東日本旅客鉄道労働組合（＝東鉄労）。その論調は昨年末、和解で決着した二百億損賠と国労会館明け渡しの一つの裁判について、分割・民営化を認めた国労の態度は「完全敗北」というものだ。国労の全面敗北が本当ならば、ざまあみろと高見の見物でもしておればよさそうなのに、そうはしない。東鉄労には国労の闘いを勝利させてはならない特別の理由があるためだ。

今回の和解が解雇撤回闘争を解決に導く糸口となることを百も承知の東鉄労。亀井運輸大臣の仲介で成立した和解に、JRとともに蚊帳（かや）の外に置かれて危機感をつのらせた。JR東日本の松田昌士社長と東鉄労の松崎明委員長との蜜月体制崩壊の危機が現実味を帯びてきたからだ。東鉄労の親組合であるJR総連は、東海、西日本、九州、四国のJR各社ではいまや少数派組合。外堀は埋められ、最後に残るだろう牙城が東鉄労なのだ。彼らも今回の和解で「相談がなかった」のは、その牙城に最後の日が近づいたというサインと受け取ったのだろう。

JR総連には敵が多く、しかも日をおうごとに増えている。反国労はとりもなおさず反国労支援者である。いまや東海、西日本、九州、四国では反JRである。多数組合から少数組合に立場が変わると、会社に対する態度も一変したのだ。国鉄改革の完遂に挺身していたのが、翌日からストライキを構える。昨日まで国労を敵視していたのに、分会レベルでは手の平を返し、臆面もなく共闘を申し出る。JR東日本では東鉄労の牙城を死守するために、親JR・反国労である。その牙城が崩れたときは、条件次第でいつでも反JR・親国労にもなりうる。朝令暮改のその姿勢を、無節操と批判しても東鉄労には通用しない。変節を本領として生き延びるのが東鉄労の節操なのだ。

そのJR総連が学者・文化人等呼びかけて「九条連」（憲法九条——世界へ未来へ連絡会）を組織した。実態を知らない人は、良いことをやっている良い組合だと錯覚する。岸信介が公式の席で「憲法九条を守る」といえば、岸は良いことをいう良い人だと錯覚するのと同じである。「九条連」は、JR総連・東鉄労の実態を覆い隠す偽装運動である。それは、読売憲法改正試案が登場することご時世に、反戦・平和の運動を大胆にすすめる労働組合がどうして国労の解雇撤回の人権・民主主義闘争に敵対するのか、と自問自答することによって証明されるだろう。

ケンタウロス

ギリシア神話に半人半獣の動物が登場する。JR総連・東鉄労は、このケンタウロスに例えられる。ここに、東鉄労機関紙『こら！』第一五号（九五・一・二五日付）に載った松崎明委員長の興味深いエッセイがある。半分はカッコつき人間的部分、あとの半分が獣

的部分とでもいえようか。少なくとも額面上これほどせつ然と区別できる文章は珍しいという意味で興味深い。

カッコつき人間的半身部分は、松崎氏の戦後民主主義論である。ノーベル賞作家である大江健三郎氏の戦後民主主義の問い直しに同感を寄せ、こう総括している。「かつてのA級戦犯岸信介がなぜ総理大臣に返り咲くことができたのか。産業報国会厚生部長だった三輪寿荘がなぜ『革新』の社会党代議士になりえたのか。これらを可能ならしめた日本の戦後民主主義の質とは、一体なんだったのだろうか。いま問わざるを得ないのだ」と。そして、この問い直しなしに、「新五五年体制としての一九九五年を、人間として、どう主体的に意識するかということが見出しえない」と。

松崎氏のこの立論は、保守改憲派が戦後一貫して主張してきた「押し付け憲法」論批判にとつて有効な反論であるかのようだ。しかし、『あまいな日本の私』の中でも執拗に追求されている大江氏の問い直しと異なるところは、大江氏には戦争の歴史をアジアと国内の人間の正気を踏みにじった歴史を持つ国の人間としての文字どおり痛苦を伴う主体的な問い直しがあるが、松崎氏にはその片鱗もないことである。松崎氏の問い直しは、戦争を「媒介的に体験した一人の人間」として、不徹底に終った戦犯追及を批判することに求められ、そのことをもってはじめて一九九五年は主体的な意識となるというものだ。しかし、自己を内省し、戦前と戦後の連続性を人間の威厳を問う観点から深く省察し、戦後新生日本のモラルを民主主義と不戦の誓いに措いた大江氏の態度とは似て異なる問い直しである。

松崎氏は、日本人が背負った歴史の通苦を自己には負わせることなく素通りさせ、それを他者批判に転化する。そのような人間を西洋の人々は恥知らずな、反モラルな人間として蔑むが、そんな事情は松崎氏にとって痛くもかゆくもない。そして、「私は、労働組合のリーダーとして、民主主義を守る闘士であり、ヒューマニズムを徹底的に追求する人間でなければならぬ」と自らを民主主義の闘士、徹底的なヒューマニストに擬す。松崎氏の半身は実は、内容空疎な「人間」でしかなかったのだが、次にみるもう一つ半身の「獣」部分と不可分に、無理なく接合した「人間」の顔をした「獣」であったのだ。

ドーピング

松崎氏のエッセイは、「負けるな亀さん、十周遅れのトップランナーに―あいたずさえて完走を―」というJR労働問題の素人には判然としないだろう奇妙な題がつけられている。「亀さん」とは亀井運輸大臣のこと、「十周遅れのトップランナー」とは国労に冠せられた精一杯皮肉ったつもりと呼称である。分割・民営化から十年も経とうというのに、今頃になって「分割・民営化を認める」などと政治屋のお芝居もいところ。われわれ(東鉄労など)の度重なる苦労の連続を振り返ることなく、「三ない運動」(一九八四年分割・民営化の地ならしとして国鉄当局は派遣・出向、一時帰休、退職前提の休職の首切り三項目を実施。国労は行かない、休まない、やめない運動を展開した)を指導し、分割・民営化に反対してきたのは国労ではないのか、その国労が名実ともに「分割・民営化を認める」最後まで亀井運輸大臣は監督する責任がある、と野次るのである。

公認のトップランナーは、むしろ「多くの人々」である。とりわけ国鉄当局にとって「鬼」から「仏」に变身した松崎氏率いる旧動労の親衛隊である。動労の变身第一段階は動労解体までのみそぎの時期、第二段階は旧鉄労と手を組み分割・民営化を積極的に推進する労働組合を再編成する中核組合となった時期、第三段階は鉄労を排除し、松崎独裁体制を確立する時期、そして第四段階はJR会社の職制機構と運転部門を中心とする会社の枢要機関に親衛隊を配置し、会社を疑似的支配下に置く時期。JR東海、西日本等では第三段階に至る前に会社・鉄労等の反撃を受けて松崎氏の野望は未然に阻止された。しかし、JR東日本ではその浸食状況は第四段階に至っており、日本を代表する大企業の労使関係が旧動労親衛隊＝革マルによって牛耳られるという異常事態に陥っている。

つまりJR総連・東鉄労は分割・民営化を積極推進する立場に転向することによって今日の地歩を築いたのである。国労組合員が何人解雇されようとも、国労が存亡の危機に直面し困難に陥ることはJR総連・東鉄労にとって大いに歓迎すべきことなのである。そしてJR総連・東鉄労はきまっつこういう反論を持ち出す。すなわちわれわれJR総連・東鉄労は分割・民営化の際に派遣・出向にも、一時帰休にも、退職前提の休職にも、広域採用にも、希望退職にも積極的に応じて「骨身を削った」、しかし国労はただ反対しただけではないか、だから自業自得であり、身からでたサビだと。この論法からいけば、たしかにそれから十年経った今頃になって、「分割・民営化を認める」というのは十周遅れのランナーであろう。

もっとも、彼らにとって、分割・民営化の直前の一時期に彼らが体験した「苦労」と国労が分割・民営化前後の十数年間に体験し、今も体験している「苦労」とを比較してみてもなんの意味をも加えない。また国労にとっても「苦労」の軽重比較は、こほど無邪気な慰みはないだろう。彼らJR総連・東鉄労にとつて「苦労」の比較は無意味だという真実は、彼らは彼らの「苦労」だけが唯一絶対であり、他人の「苦労」などは彼ら自身の政治的救済に役立つ限りでしか眼中にないという一点にある。そして彼らの「苦労」は自分だけが助かりたい、無難に生き延びたい、生き延びたその先で当面国労に替わって第一組合の地位を得ようという野望と政治策略に基づく戦術にすぎず、したがって会社へのまっつき忠誠の証でしかなかったのだ。

彼らJR総連・東鉄労には「自分たちの味わっている苦しみを他の人間たちに味あわせなくてはならない」という真に人間的なモラルは微塵もない。そのモラルの伝統に誇りと勇気を確認しながら、国労が分割・民営化に反対し続けたおかげで、その間隙をぬって漁夫の利を得ることができたJR総連・東鉄労。彼らは、国家ぐるみの不当労働行為に荷担し、国労解体から総評解体を経て憲法改正に至る戦後政治の総決算路線の推進勢力となったのである。もし労働運動の良心という言葉が死語でなければ、彼らはその良心をかなぐり捨て、良心的労働組合が犯してはならない禁手に飛びついたのである。その意味で彼らは良心的労働運動の境界を越え、会社と一体の組合から会社を擬似的に支配する組合への道へばく進するほかに活路はなかったのだ。

かような経過があったことを前提にしても、たしかに彼らJR総連・東鉄労は公認のトップランナーである。ただし、ドーピングを犯したトップランナーである。その違反行為が白日の下に暴かれ、彼らが生息する居心地の良い地位を追われる日が必ず巡りくる。そのときA級戦犯岸信介の復活を断罪した刃が彼ら自身の胸を貫くだろう。日本人の良心は彼らのごとき反モラルな卑劣感を許しておくほど寛容でもないと思えるからである。

希代の陰謀家

松崎氏が自らを民主主義の闘士と認めるのは、たしかに他人がとやかく口をはさむ問題ではないだろう。しかし、彼の言動を人間的かつ歴史的正義と信義に照らして適切とみるか否かはまた別次元の問題である。これまで検証してきたところによれば、彼は口先だけのヒューマニストであり、はつきりいつて労働組合のリーダーとしては珍しい希代の陰謀家の一人である。

大江健三郎氏と並べて論評すること自体気がひけるのだが、松崎氏のヒューマニズムはすでに述べたように他人の痛みを平然と黙殺し、その痛みの加害者と共謀しうるそれである。大江氏が『ヒロシマ・ノート』に書き留めた「徹底的な卑劣さにかざられたヒューマニズム信仰」の赤裸々な嫡子であり、「道徳的荒廃」と「厚顔無恥な裏切り」をもの見事に体現した最悪の「唇の卑しさ」をもつ「人間」がその正体である。正統な人間の仮面をかぶり、もっぱら暗闇部分にうごめく怪しいヒューマニズムを基底におく松崎氏の戦後民主主義論から紡ぎ出される憲法擁護論は、日本人が加害者と被害者の双方の立場で体験した歴史的痛苦を内なる反省によって濾過したそれとは深い溝をはさんで永久に交差することはないだろう。

そしてそういう内なる思想的営為によって支えられない憲法擁護論は、人間の崇高な善意を全うしようとする責任から逃避するものでしかなく、ときにはいかかわしきの極みでさえある。それは、中曽根が唱えた戦後政治の総決算の緒戦段階の攻撃に進んで屈服し、憲法改正への露払いを行なった松崎氏らの歴史的な行跡に照らしていつでも証明できることなのだ。

(投稿 山上海洋行)

◇ 編集部だより ◇

- ▽上野建一著『政界再編後を読む』が好評です。ぜひご注文ください。くわしくは前号を。
- ▽春闘は惨たんたる結果で終了。円高、阪神大震災、NTTショックがいわゆるが、連合路線の当然の帰結。労働運動にはやうまい手はなし。
- ▽サリン、オーム、警察庁長官狙撃事件。日本は新たな段階に入ったようだ。

◇『社会通信』六百号に寄す◇
沈黙は金に非ず、組織にとつて死

三木 信之介

社会通信は、ついこの間十五年のお祝いをしたかと思つていたら、もう十九年目の六〇号、激動の中の確な情報を全国に送りつづけた社会通信に心からのお祝いを申し上げますと共に、時の流れの早さにただただ驚くばかり。
二十一世紀まであと五年、世紀末は人の心もゆれ、政治も自然も不安定になるのであるうか。

阪神淡路大震災と対比されるのは関東大震災（大正十二年九月一日）その時も日本の政治は不安定であつたという。

「政界では、政党間の醜悪な争いがつづき、軍備の拡大に伴つて軍部の介入もいちじるしく、内閣はいたずらに総辞職を繰り返していた。そして、八月二四日総理大臣加藤友三郎の死によつて山本権兵衛が内閣組織の勅命を受け、組閣工作に、つとめていた。が、政界の反発によつて、組閣工作は難航していた。そうした中で突然大震災が起つたわけだ。」（文春文庫、関東大震災、百二十三ページ）。

いま日本社会党は結党以来最大の危機をむかえているが党解体へむけて動く震源地のひとつ兵庫を大地震が襲う。この偶然のめぐり合せを何と考えたら良いか、護憲社会党がらばる兵庫の仲間からのお見舞を申し上げる。

九五春闘も震災対策の名のもとに早々と旗をまく労働組合、独占資本のしたたかさに比べ何とも、なさない話だが、低賃金と合理化にあえぐ組合員は、いつまでも、このような組合幹部を放置しておかないであらう。

九五春闘、地方選が終れば世の中は政治の季節に入り、参議院選とは喜んで産別大会が開かれ、労働組合の政治方針が争点となる。

戦後、日本社会党が総評とともに守り育てて来た、平和と民主主義の路線をどう守り次の時代へ引き継ぐかが問われる。

そのためには、党も労働組合も民主的な機関運営を求めて行くことが必要だ、党も労働組合も執行権と決議権は明確に区別されており一部の人間に白紙委任はしていない。

それぞれが持つ権力を最大限に活用すること、沈黙は金ではなく、現状を認めることであり、組織にとっては死を意味する。

◇『社会通信』六百号に寄す◇
歴史的転換期、切り拓く力つくれ

滝沢 隆

世相の変化のこれほど激しい時期は、もう六〇年を越えた私の人生でも稀であつた。

技術革新と生産力の驚くべき発達がこれに先行している。マルクスは社会発展の原動力を生産力と生産関係の対立の中に見出し、特に生産力の発展をその規定的要因としたが、社会の変化の様相はその理論の正しさをまざまざと示している。

一昔前なら数年後の情勢がある程度予想することも出来た。ところが今は「明日のことさえ判らない」という人が多い（生存の不安定！）。

だが振り返ると、現在に限らず、明日の運命すら判らぬ時期がかつて確かにあつた。戦中並びに戦後の動乱期だ。

明日の命……は大ゲサとしても、明日起る事象が読み難いという現在は、まさに戦争状態にも比すべき動乱のさ中なのかも知れない。

動乱期には人の価値感がころころ変る。これも「存在が意識を規定する」としたマルクス主義科学の指摘する通りだ。

こともあるうに、戦後の結党以来、ほぼ一貫して貧者、弱者の味方として活躍して来た社会党の首脳部が「ついにルビコンを渡った」といわれるほどの大転換を、ここ一年余の間に「敢行」し、多くの黨員、支持者を混迷させている。

「大海中の島国日本」といへども、世界的な変動の埒外にいることはできない。結局この「動乱」「混迷」も世界的変動の一環であり、資本とその代理人達が、これを自己に有利に利用すべく必死に立廻るのも自明のこと、マスコミ総動員も異をするに足りない。それに眩惑され、前後の見境もなくなつての主張と一八〇度異なる道を選ぶとは余りの見識のなさだ。とうてい「理論と行動の党」の幹部とはいえず、その求心力が落ちるのも当然だ。もはや右派幹部や議員を支配するのは崇高な理念でなく、低劣きわまる個人の利害だけである。

このような中央と地方、あるいは指導部と末端黨員、支持者の断絶状態の評価について種々の違いが出るのはむしろ自然で、誌上にもそれが反映する。同志的な論争が早急に集約されるのは誰しも望む所だ。

すべての社会的事象をマルクス主義的立場から説明する上で果した本誌の役割は否定できないし、それは今、ますます重かつ大である。

瘦身よく全国を馳せる社主、陰で支える夫人やスタッフ、そして読者の皆さんが健康に留意され、一致協力、この歴史的転換期を正しく乗切って頂きたいと思う。

◇「社会通信」六百号に寄す◇

「弁証法」の湧出を：

佐々木 守雄

本誌は、先を照らす「松明^{たまつ}」です。船の「切ッ先」でもある。向坂先生が、つとに、労働派の症状潜伏等を見抜き、本誌を激励したものと深察している。これに応えて闘い続けてこられた滝野夫妻もえらかった。私などは、お手伝いもできず慚愧の至りである。

誌二〇年目をむかえ、師向坂の、重厚で深みがあり、しかも愛情ある文章や作風にいま一步至らないものかと思っている所である。ここに一文がある。「仲間を裏切らない」という大命題で、まず冒頭に、―これは「何という高貴な言葉であろう」と、感慨を込めてのべている。若きマルクスも「高貴な人たちに囲まれたい」と述懐している。そして、この「労働者のモラル」や「精神」は、働く人たちが、日本国民の「必要な一切の物質(富)を生産し」、そして「そのことよって」「自分たちの精神的富も創り出し」：「社会の発展も担っている」がゆえに、そこから醸成されてきたのだ、と打ち出される。

いま流で言えば、「労働なくしては」―一台のテレビも一粒のコメもできない。師が、国労等のストで列車が一メートルも進まない実態を、労働(力)価値論を止揚させながら繰り返し語られ、話されたことを忘れることはできない。ずばり、社会の主人公・職場の主人公・の理論と実践を判り易く展開されているのだ。この価値論の支柱からこそ、まともで心ある(まど心!)労働運動と、世直しへのエネルギーが物質化し地に着こうというものだ。本誌も資本論の精神を回帰させてほしい。

いま、私は「分水嶺」から「こちら側」へ結集しようと呼喚し続けているが、この戦線の台風の目に「働らく人たち」があるのは必然である。今や、この戦線構築以外に「あちら側」に勝てる戦略はない。

さて、先程の一文では、労働者の高貴なモラルは、「平和と文化」をも担うと、下↓上部構造に位置付けしている。

そして最後に、これら社会の主人公を強化拡大するために、「人間の労働を食って肥え太っている資本」に、断固として、「団結をさらに団結」して「突破するしかない」締めくくる。

「社会通信」の今後も師のように唯物論・唯物弁証法・唯物史短(「三唯の法則」!)

一従って闘ってくる労働価値論をより源泉とし、そして国鉄分・民反対などの諸闘争に湧出(止揚)させていくことが重大課題であろう。

組合民主主義を拡げ、仲間の声を押し上げる

——全通・第二回全国青年部代表者会議から——

青年部の組織改編（九三年）以降、通算して四回目となる代表者会議（従前の全国青年部長会議）が過日開催された。春の代表者会議は昨年を引き続き、青年部長と女性の各地区二名が参加対象となっている。全国各地区がそろって新青年部へ移行して半年を過ぎようとしているなかでの会議の位置もあり、一定程度全国における運動の全体像や私たちが意識をしたり考えあつていくべき課題も明らかになったと考えている。

昨年より、全国各地区（兵庫は今年も準備委員会）において「新しい」青年部に衣替えがされた。当初より、本部は、新たな団結にもとづく新しい運動の先駆的な役割を果たす青年部へ大きな期待を寄せていたのは誰の目にも明らかだった。そのような意味では、僕自身、全国の運動がどうなったのか不安でもあり逆な意味で期待（本部の思うようにいくはずはない）もしながら今回の会議に参加した。

十分な交流はできなかったものの、年代別の部屋割りなど本部の配慮（別の目的もあったものと思われるが）でこれまで交流のなかった地区の青年部長と話す機会もできたり、女性参加者の声も若干聞けたことが大きな成果だったように思っている。

会議の場では、こちら側がそれなりに意識的に、かつ地区の事情も考慮しながら（この課題でなら反映できるという構えで）意見反映もされた。もちろん、数年前の青年部中央委員会のようなわけにはいかないが、逆にこうした困難な情勢は「本部にモノ申すだけでなく、参加者にも聞いてもらう」ということの重要性を僕らに教えてくれているのだと思う。そのような意味では、若者のニーズではないが、発言のなかでは、私たちが交わしている「専門用語？」が多ければ参加者はちんぷんかんぷんだろうし、どのように運動の中でつかんできた仲間の声や実態から課題をつきだしていくのがより大切になってきているのだろうと考える。

また、会議の場での発言は積極的にとする一方で、僕らと交流のない地区の青年部長とどれだけ交流をはかるかということも重要な課題として位置づけてきたところである。彼らは、職場の問題や本部への疑義を唱えることには直接間接問わずシバリがかけられており、発言しないのが通例である。しかし、本当に僕らが不十分ながらも報告しているような実態や仲間の声をつかんでいたり、あるいは現在の運動に対する不満や要望はないのか……？ 決してそうではない。僕が新しくなった○○地区の青年部長からはこんな話を聞いた。「自分のいる○○局（都市圏の大局）は新局舎になって六年目だが、毎年のように現職死亡がある。四年前には、新採の女性が飛び降り自殺した。その女性は職場に入ってからノイローゼになり、何ヶ月か長期休養していたが、その課の計画代理から親ともども呼び出されたその日に……。今じゃその代理は、小さい局ですけど○○局の局長ですからね。やってられないよ。」と。また、「そんなものだから『おばけ』がでるといふ噂もあつ

て、新夜勤非常勤が「おぼけをみた」を辞めていつてるんです。自分も気持ち悪くて仮眠室には行っていないんです。組合要求で「御被いを」と当局にあげてるくらいなんです」と。さらに「こんな話は聞いてないですよ」と。政治関連では、新民連のメンバーを抱えている地区ということで、「選挙なんてやってられない。でも役員だからそうもいかななし。前回の選挙で当選した推薦候補は、今は自民党ですからね」と。やるせない口ぶりで淡々と語ってくれた。

また、分散会でははからずも「高齢化社会を考える」というテーマの議論に参加した。どんな議論になるのかと不安（本部の意図は、ボランティアにつなげるものだったようだが）だったが、司会者の青年部長が慣れていないせいもあって良い意味で本部の意図どおりにはならなかった。

少子化傾向は事実であり、高齢化社会が間近かなことも事実なのだが……。どんな議論になったかという点、異口同音言われていたのは、（高齢化社会にどう対応するか以前に）なぜ少子化傾向にあるのかということ、[共働きでないとやっていけない]「子育てしながら働くことの大変さ（休暇制度や職場の条件）」が若い二十代前半の女性から言われ、そのことで若干の議論となった。

通信病院の若い女性からは、資料としてだされていた「国のゴールドプラン（厚生省の高齢化社会に対応するシステムの確立にむけた計画）」にふれ、「今でさえ看護婦不足のなか、介護や看護の資格を持つ人を増やすことはそんな簡単なことではない（3K職場なのにとという意味合いで）」と言われていた。また、貯金支部の女性からは「事務センは通勤緩和など比較的とりやすいとは思いますが、今日ではそうでもなくなってきた」と事務セン合理化の実態が反映された声も。

会議全体のながれは本部による強引な運営によるところが大きく、不満も不信も感じざるをえなかった。しかし、それが全通運動の冷徹な事実でもあり、本部を許しているのは現場の私たちであるはずである。そのような意味で、私たちが日々の運動をつうじて組合民主主義を抜け、仲間の声を押し上げていくことを通じてしかこの現実を変えていくことはできないことも冷静に受けとめなければならぬと考える。今回の会議（他地区との交流も含め）をつうじて「新しい運動をと求める本部とそれだけでは運動は進まない現実と実態のすれ違い、言えば明るい楽しいだけでは解決されない多くの課題や問題が職場には山積している」ことが明らかに、その意味では元気が出た思いである。

また参加者間での新左翼&右派との党派的緊張感も皆無に近く、良い意味でこれまではそうしたなかで挨拶も交わさなかった地区との交流も可能になっていることは、プラス面としてうけとめ私たちの運動を抜げていくうえで積極的にかかわっていくことが必要だろうとあらためて認識した。

いづれにしても、青年部運動を取り巻く情勢の困難さは否定できないが、展望は私たちの職場や地域、さらには全国のまじめに活動をしている仲間とのかかわりのなから見出すことが可能であることと、それらを力にしていくなためにも同志間の情報・意見交換が不可欠であることと考える。

（全通・み）

◇ 読者からのおたより ◇

拡大に努力中 さてさて選挙闘争も春闘もなかなか燃えない職場の雰囲気の中で、いかに流されずに仲間、とりわけ青年を組織するなかで毎日四苦八苦しています。それだけ日常的な学習と交流が不足して「合理化」への怒りがうすれてしまっているのだと思います。当面、そこに手をつけていこうと思っています。

(全通・S)

編集部より まず集まることから始めようよ。

六百号おめでとう 「社会通信」六百号おめでとう 乾杯!!

(向坂ゆき)

編集部より おたより、そしてお心使い、ありがとうございます。楽しくがんばる。「通信」読んでます 神戸は二ヶ月遅れで統一地方選が実施されます。被災者の気持等を考えるとどのように選挙戦を準備すればいいのか。仲間と討論しながら準備してまいります。社会党の変質には驚かされますが、働く者の生活を守るために憲法を活かす活動がますます重要になってきています。

(神戸・S)

編集部より ご愛読ありがとうございます。兵庫は私たちの機関車。がんばって!

なんで「兵庫」に まあよくぞこれほど「兵庫県」に全国に名を知らしめることが続くのでしょうか。まるで悪霊が棲みついているかのように。震災復興はさまざまな問題を起こしながら、ゆっくりとしたテンポで始まっています。私は神戸市職員ですから、中にいて多くのことを見てきていますが、まだまだ整理はついていません。護憲社会党の復興対策も検討中です。しかし二ヶ月延期された統一地方選はまちがなくなっています。何をすればいいのか、困惑の日々が続いていますし、「仕事」の関係、集まる所もない状況で「アセリ」だけが先に立ちます。

(神戸・M)

売れゆき上々「イカ一夜干」 昨年九月から始まった新商品三種類も四ヶ月の間に三千八百八袋の販売。東京の皆さんの味覚に合うのか、新鮮でうまい魚が届くのか不安もありましたが、販路拡大に道が拓けそうです。イカ一夜干も大健闘しております。周りの仲間へのよびかけなどご協力よろしく。

(稚内闘争団)

編集部より お申し込みは☎〇三―三二―五―五四四五(国労新幹線支部内)に
講読します 以前より「読め、読め」と勧められ、時々コピーもらって読んだりしてたのですが、今回よりお世話になります。

編集部より 新規のご講読ありがとうございます。回りの仲間にもよろしく!
『政界再編後を読む』送って 『社会通信』六百号おめでとうございます。各地域で九五統一自治体選が闘われていますが、私たちも地域の仲間の要請に応え、国労稚内闘争団・藤谷良幸副団長を市議員候補として擁立し、連日必勝に向け活動しています。憲法を守り、平和と民主主義を守り、差別と闘いつづけてきた上野氏の本を読み、今たまたかっている選挙闘争に活用していきたい。

(稚内闘争団・上出)

編集部より 過日はお世話になりました。必勝祈ります。本の感想も寄せて!
待望の学習文献 上野さんの「政界再編後を読む―護憲の旗を掲げて」は待ちこがれていたもので、喜んでいきます。地域でも拡めたい。

(音威子府・鈴木孝)

編集部より さっそくのご注文ありがとうございます。読んで、拡めて。